

ISAPH

アイサップ
ニュースレター

第15号

News Letter

2013年5月25日発行



写真：成長モニタリングに参加する母親と子ども



ISAPHはラオスとマラウイの母親と
子どもたちの保健の向上を支援しています

NPO International Support and Partnership for Health

日本ラオス研究会に出席して

聖マリア病院国際事業部部長・ISAPH理事
浦部 大策

3月下旬に名古屋大学で開催された日本ラオス研究会に出席しました。この研究会は、学術的にラオスを研究している人たちが集まり知見を共有しようというもので、昨年からはまった新しい会です。参加者の顔触れも大学や研究機関が多く、一人の発表者あたりの持ち時間も質疑応答の時間を入れてではありますが、50分と非常に長いものでした。単に研究の成果を発表するものではなく、現地の文化や習慣について調査、研究の結果得られた知見について意見を交換しようというのが主旨でした。とりわけ文化や習慣に関する分析については、研究者ならではの調査や分析手法で解釈した内容が多く、異文化の科学的なとらえ方を示されたようで興味深いものでした。

今回私は、ISAPHのラオスでの活動を通して発見した、ラオスの保健衛生事情の問題、カラムアハーンやタブーなどの地元民の習慣、それらの習慣との関りで発生しているラオスの乳児の栄養問題とビタミンB1欠乏症の問題、更にこれらの問題の改善を目指して取り組んだ保健プロジェクトについて、これまでの経緯をいかにつまんで報告しました。研究会参加者の中には保健関係者が少なかったため、単にビタミンB1欠乏に対する取り組みだけでなく、ビタミンB1欠乏と地域住民の食習慣との繋がり、食習慣が健康に及ぼす影響、食習慣や日常習慣に対するISAPHの介入手法などについて、現場での活動風景の写真を交えて説明を行いました。

私の発表に対して、研究会に参加していた方から様々な意見をいただきました。「長年ラオスについて研究しているが、住民の生活習慣が栄養、病気という保健にどう影響しているのか、ということについてはあまり考えたことがなかった。今回の話で事情が分かった」という意見や、「自分たちは単にラオスの一断面を研究しているだけなのに、ISAPHは問題を分析して、それを変えようと介入活動をしている点が印象深かった」などといった言葉をいただきました。ラオス研究

の経験が長いにもかかわらず、現場に介入して現状改善に取り組んでおられる団体は少ないようで、自分たちの研究もISAPHのようにラオスの状況改善に繋がるような形にしていくことも、もっと考えていくべきであったとの意見が出されました。本研究会の主催者によると、「長年、自分たちがラオスで見聞きし、積み重ねてきた知見であってもそれを他の団体と共有して活かす場がなかった。そのような現状を見直し、ラオスで仕事をしている人たちが個々に持つ情報を共有し、自分たちの活動をお互いに補完、連携し合える場、あるいは関係者を繋ぐ場としてこの研究会が機能できたらと考え、立ち上げた」ということでした。

研究会後の懇親会では、ラオスで個別に行われている様々な研究の成果を多くの人と共有し、医療、学校教育関係者や農業、林業、食糧など複数の分野の日本人研究者と連携して、ラオスの現状改善の為に包括的なアクションが実施できれば、ラオスに面白い変化を起こせるのではないかと、という考えで盛り上がりました。今回の研究会に参加して、日本人のラオス研究の積み重ねがいかに深いものであるかを感じることができました。ISAPHのラオスでの活動でも他のラオス研究者、研究機関と連携することが十分可能であることも分かりました。今後のISAPHの活動では、広く他の研究者、研究機関に支援・協力を呼びかけ、より質の高いアプローチを展開していきたいと感じさせられる会でした。



産後の一定期間を炭のそばで過ごすラオスの習慣「ユーファイ」は食事制限や行動制限を伴う

アイ

iサイクルより寄付をいただきました



ISAPH 事務局

平成24年12月～平成25年3月までのペットボトルキャップ収益として、iサイクルより42,339円（キャップ846,792個分）の寄付をいただきました。ありがとうございました。

iサイクル オフィシャル・ホームページ <http://www.st-mary-med.or.jp/icycle/>

小早川理事長がラオスを訪問

ISAPH ラオス 福山 修次

2月5日から14日の10日間、ISAPHの小早川理事長がラオスを訪問しました。目的は、ISAPHラオスの活動状況の確認と関係者への表敬訪問です。

ISAPHラオスの活動地であるカムアン県では、今回の訪問の主目的である県保健局長トーラカーン氏と活動に関する協議が行われました。同氏からは、ISAPH活動地域において低体重児が減少してきたことや、妊産婦・乳幼児の死亡率が下がったことに対する謝辞が述べられました。そして、ISAPHの理事であった故野田進士先生のご遺族からのご寄付により建てられた野田教授記念研修センターは、郡保健局の会議や研修、さらに宿泊施設として極めて多角的、高頻度に有効利用されていることが感謝の念と共に報告されました。また、同氏からはカシ地区のヘルスセンター建設の要請と、中古の医療機器の供与の要請がありました。ヘルスセンターを建設することで、妊産婦や乳幼児の死亡率をさらに下げて、世界的に2015年までの目標とされているMDGs（ミレニアム開発目標）を達成したいとのことでした。

小早川理事長からは、ISAPHの活動は技術協力を主とするもので、基本的には物品・施設の供与は行わない旨を伝えました。しかしトーラカーン氏の強い要望により、翌日に郡保健局長らとともにカシ地区ヘルスセンターの建設予定地を視察することになりました。すでに土地・建物の設計図も準備しており、ここには職員用の宿舎も建設するとのことでした。

今回の表敬訪問では、ISAPHのこれまでの活動に



カシ地区ヘルスセンター建設予定地視察にて、村人に歓迎される小早川理事長

対する感謝の気持ちが伝えられるとともに、新たな要請もありました。途上国でお互いの理解を深めながら活動していくには、こうした要請にも耳を傾けながら進めていくことが大切です。ときに無理難題を要請されることもあります。それを無下に断っているのは、お互いの信頼関係を構築することは難しくなります。途上国で活動するにあたり、現地にできる限り多くの協力者を作ることが必要です。よって定期的に表敬訪問をすることでお互いの理解を深め、人脈を保つことがいかに大切であるかを、改めて実感しました。

表敬訪問日程

2月6日 保健省 外務省 JICA ラオス事務所

2月8日 県保健局 県庁

2月11日 サワンナケート県立病院



カシ地区ヘルスセンター建設予定地にて、説明を受ける様子



保健省官房長官のナオブッタ氏を表敬訪問



ラオスからの報告

聖マリア病院 ラオス国スタディツアー

平成25年1月5日～10日に、聖マリア病院のラオス国スタディツアーの受け入れを致しました。参加された聖マリア病院職員3名の方の感想文をご紹介します。

ラオス国スタディツアーに参加して

看護師 渡邊 汐里

平成25年1月5日～10日の6日間、ラオス国スタディツアーに参加させていただきました。実際に医療現場を目にして、患者さんが医療を受けるまでのシステムの違いに驚きました。また、救急というシステムはなく、異常があっても自主来院しないと治療は行われ、金銭的な負担が大きく関与し、十分な治療が行われない現状があります。救命しても、逆になぜ助けたのかと家族から問われることが多々あるそうです。日本では患者・家族は生きたいと思い、それを助けたいという思いから医療や看護を提供する。それがあたり前ではないこと、金銭的な問題から助かる命が見捨てられている現状があることを痛感しました。

一方、私は手術室勤務をしているため、手術室の環境・物品・看護師業務を視点に見学をしました。諸外国の支援のもと様々な症例の手術が行われており、今までできなかった手術が、他国の協力によって実施されています。このような環境で手術……と驚いた反面、いかに自分が恵まれた環境・設備で業務をしているかということを改めて考えさせられました。国際支援の一つひとつが、一つの国の医療を大きく支えている現状に国際協力の重要性を強く感じました。その反面、スタッ

フ間の言葉の壁があるそうです。支援が入ることで助かる患者さんは増える一方、連携という面では様々な問題があることも知りました。

今回のスタディツアーを通して、国際支援するにあたり目で見えている問題を解決したいと考えてしまいがちですが、その国の文化・風習を理解し、援助なくして自立できるようどう介入していくか、国際支援活動の難しさを感じました。

国際協力への関心が高まった研修であり、そのために今の自分に不足していることは何か、手術室看護師として自分ができることは何かということを見つめなおす機会となりました。貴重な経験をさせていただき、サポートしていただいた皆様に本当に感謝いたします。



現地の手術室看護師さんと

将来の目標に近づいた ラオス国スタディツアー

理学療法士 庄田 清人

今回、平成25年1月5日～10日までの6日間、ラオス国スタディツアーに参加させていただきました。ツアー期間中には、ラオス国の文化（衣・食・住）に触れ、また病院（国立・県立・郡）の状況や村でのISAPH活動現場などを見学させていただきました。

その中でも最も私の印象に残ったのは、村でのISAPHの活動場面でした。村の人々が熱心に健康教育を聞いている姿や、子どもたちとその母親の「笑顔」をたくさん見ることができました。この場面を見た時に私は、この笑顔のために働きたいと強く思いました。

私は将来、理学療法士として青年海外協力隊へ参加することなどで、国際協力に携わりたいと考えています。そのため、実際の国際協力の形を見ることができたこ

とは、将来の自分の活動内容を少しイメージすることができたと感じています。理学療法士としての視点で見ると、ラオス国の障害者を取り巻く環境には様々なバリアーがあると感じました。整備されていない医療制度などの制度的バリアー、舗装されていない道路や車椅子の不足などの物質的バリアー、障害を持つことは恥ずかしいことであると考え外に出さないなどの精



村でのISAPH活動の様子

神的バリアーなど、多岐に亘ると感じました。このような事実を実際に自分の目や耳で見聞きして実感できたことは、非常に貴重な体験となりました。今回のツアーをきっかけに異文化に触れる機会を増やしてい

途上国の現状についてもっと知りたいと思うことができました。このような場を提供していただきました関係者の方々、ラオスの人々に深く感謝いたします。本当にありがとうございました。

ラオススタディツアーに参加して

看護師 三久保 志保

今回スタディツアーに参加し、途上国の医療、生活現場を肌身で感じることができ、刺激的な毎日でした。未だに貧富の差が激しく、お金がないことで命を落とすという悲しい途上国の現状を知り、胸が痛みました。

医療現場を実際に見学しましたが、国立病院と地方病院では格段の差がありました。ラオスの看護業務は幅広く、様々な職種に支えられている日本の医療体制の素晴らしさに気付かされました。また、病院内では家族が24時間付き添い、身の回りの世話はほとんど家族が行っていて、家族愛の深さを痛感しました。

今回、シーブンフアン地区の一部の集落に訪問することができました。村内には、今の日本では考えられない生活環境で暮らしている人々がいました。その人々は高床式住居に住み、大人も子どもも素足で生活をしていました。この地区には産前産後の長期にわたる食物タブーや、母乳を悪いものだと考える因習が存在し健康問題となっていました。長年の習慣を



シーコッタボン寺院にて

変えることは難しく、ISAPHの方々が根気強く支援する姿を見て、異文化での医療支援の難しさを感じ、ISAPHが活動している地域密着型の支援は、途上国に必要なことだと感じました。

色々な支援の形はありますが、まずはお互いをよく理解し、背景を十分把握したうえで問題を見出していくことが大切だと学びました。これは看護にもつながることだと思うため、今後に活かせるよう頑張りたいと思います。今回、このような貴重な経験ができたことを、皆様に深く感謝いたします。

🌸🌸🌸 ラオス 新スタッフの紹介 🌸🌸🌸



パイワン・ポムマヴォン

はじめまして。私はパイワン・ポムマヴォンです。両親を含め9人で暮らしています。私は第3子です。家ではドードーという名の犬とテオという名の猫を飼っています。私は早起きで、朝起きてから健康のために運動をしています。

好きな食べ物は、焼き魚とパパイアサラダとタケノコスープとラープです。好きな色は、青と黒です。

私は1月からISAPHで働いています。ISAPHはカムワン県セバンファイ郡の子どもとその母親が健康でいられるよう郡保健局と共に活動を行っています。また、住民が元気に生活するためには何が必要かなどの健康教育を実施しています。

私はISAPHの職員としてラオスの住民の健康・衛生状況の改善を目的とした仕事ができることを、とても嬉しく思っています。カムアン県でのISAPHの活動に心から感謝しています。



パニー・ケオマニー

はじめまして。パニーです。年齢は22歳です。私はカムアン県タケク市ジョムトーン村に住んでいます。

ISAPHラオス事務所で働き始めてから2カ月が経過しました。現在、ISAPH事務所内での業務とセバン

ファイ郡での定期活動へ同行しています。事務所内では書類や報告書を作成しています。シーブンフアン地区、カンペータイ地区、カン地区でのモバイルクリニック活動では身長・体重測定や、その記録を郡保健局職員の人たちと一緒にを行っています。村では楽しみながら活動を行っています。

ISAPHの支援により乳幼児と妊産婦の死亡者数が減少したと聞いています。今後もISAPHの支援が続くことを願っています。

日本国際保健医療学会学生部会フィールド実習

平成25年3月13日～22日と3月25日～29日に、日本国際保健医療学会学生部会のフィールド実習の受け入れを致しました。参加された2名の方の感想文をご紹介します。

順天堂大学医学部 中谷 諒

10日間の実習を通して途上国ラオスの実情を知ることができて非常に良かったです。病院や保健局の視察、モバイルクリニックの見学を行ってラオスの医療レベルがいかに低いかを知りました。それをもとにプロジェクトがどのように立ち上げられ、実行し、最終目的へと向かっていくのかという全体像もスタッフの方から聞きました。プロジェクトは目先の状況改善を目的とするのではなく、1、2年後に現状からの脱却を図ることがゴールであると聞いて納得しました。ゆくゆくは日本人が介入することなく、現地スタッフだけの手で保健活動を行うことができるようハンドオーバーしていくつもりであるということも聞き、自主性を養っているのでも知りました。いつまでも先進国の援助を頼っている途上国が成長することはありません。したがって、どこまで援助をしてあげるかという裁量も大切になってくることが分かりました。

また、ラオスの生活様式は日本とはかなり異なっており驚きました。特に驚いたのが食習慣です。家の近くの木になっているまだ青い実をとってきて塩気の強いソースをつけて食べたり、生肉を味付けして食べたりするなど驚きの連続でした。さらに、ラオス人は1

日3食ではなく、ことあるごとに常に食べているイメージがありました。コオロギやタガメなどの虫を平気で食べるのは日本以外の東アジアや東南アジアの食事と共通している部分だと感じました。日本人の口にはなかなか合わないような食べ物もありましたが、私自身、ラオス料理を堪能できてとても満足でした。

この実習で得たものは貴重なものであり、実際途上国の村に足を踏み入れるという体験をすることができたのは非常に有意義なことだと思います。今までテレビの向こう側の世界だったものを身近に感じることができて、世界観が変わるとともに自分の今後の選択肢が増えた気がします。この体験を発信していくことができれば、さらに良いかなと思います。このような機会を提供してくださったISAPHには本当に感謝しています。ありがとうございました。



カムアン県病院での診察の様子

聖路加看護大学看護学部 伊藤 ひとみ

日本国際保健医療学会学生部会の国際保健学生フィールドマッチングという企画で、3月25日～29日の5日間、ISAPHのスタディツアーに参加させていただきました。なぜISAPHを実習先に選んだかという、地域保健に関心を持っていたからです。病院で待っているのではなく、病院にアクセスできないような人々の生活の場へこちらから出向いていくような形で健康問題に関わりたいと考えていたため、ISAPHは実習先としてうってつけでした。

ISAPHの事務所に宿泊させていただいたので、活動のハイライトだけではなく日々の仕事の様子も見せていただくことができました。また、ベースラインサーベイ報告書やPDM (Project Design Matrix) などの資料を見せていただき、プロジェクトがどのような根拠に基づいているのか、一つひとつの活動がどのような成果を達成するために行われているのかを、実際の様子とつなげることができました。モバイルクリニックの見学の際には、去年あたりから健康教育は保健局の

人たちがやるようになったこと、2～3年後にはVHV (Village Health Volunteer) ができるようになることを期待していることなどを伺いました。着実に進歩していること、成果が出るには長いスパンで見なければいけないことを痛感しました。

すぐに成果の出ない活動に取り組むということは、私にとって大きな不安でした。しかしISAPHの活動を見て、地域に根差した継続性のある活動はやはり重要なことだと改めて感じ、目標が明確になったように思います。短い滞在でしたが、大きな収穫がありました。ありがとうございました。



郡保健局表敬訪問



「子どもにやさしい 地域保健プロジェクト」 開始準備のための派遣

ISAPH事務局 齋藤 智子

マラウイの「子どもにやさしい地域保健プロジェクト」（以下プロジェクト）開始準備のため、平成25年2月25日から4月26日まで聖マリア病院の資金援助によりマラウイへ派遣されました。現地では数週間早くマラウイに入った聖マリア病院の山崎裕章氏と行動を共にしました。

活動内容は大きく二つありました。一つは独立行政法人国際協力機構（JICA）九州国際センターの北澤志郎氏およびプロジェクトマネージャーである聖マリア病院国際事業部部長の浦部大策氏による事前調査団への支援です。調査団と共に懸案事項の解決、環境の整備、カウンターパートとの協力および実施体制の確認、対象地域の最新情報の再確認を通し、PDM(Project Design Matrix) およびプロジェクト要約の修正など事業内容の最終的な詰めを行いました。マラウイ政府の了承を得るためのミニッツ文書への署名の取り付けについては諸事情により調査団滞在中にはできませんでしたが、山崎氏の帰国直前に持ち回り署名により完了することができました。

特筆すべき活動では聖マリアグループの支援により建設されたヘルスポスト（最小保健施設）でのUnder 5 clinic（5歳未満児に対する身体計測や予防接種の提供など）の視察や、FICA（Flanders International Cooperation Agency）/FAO（Food and Agriculture Organization）プロジェクトによるコミュニティの母親グループによる離乳食の調理デモンストレーションの視察です。これらの視察を通して、末端の保健要員であるHealth Surveillance Assistant（HSA）の業務遂行状況や母親の子どもの健康に対する熱心さ、さらにプロジェクトで計画している栄養指導の正当性など活動への貴重な情報が得られたことが成果です。また、課題であった青年海外協力隊（JOCV）との連携に関しても、調査団滞在中にムジンバ県に派遣されているJOCVの方たちと意見交換を行い、今後は情報交換を密にすることを双方で確認できたことも大きな収穫でした。

今回の派遣でのもう一つの活動は、プロジェクト開始時に実施予定のベースラインサーベイで使用する質問票のプレテストです。調査員のトレーニング、フィールドでの母親への模擬インタビューを通し、実際に質問票が使用可能か否かの確認を行い、その後、関係者



離乳食の調理デモンストレーション



ムジンゲヘルスポストでの身体計測

と質問票の修正をしました。また、村での世帯の散らばり具合の確認により、想定している調査方法が可能かの確認をしました。この他に2歳未満児を持つ母親グループに対してプロジェクトに関連するトピックについてFocus Group Discussion（FGD）を模擬的行いました。これによって、母親が離乳食に対してある程度の認識があること、妊娠中に禁忌食物があること、分娩後の生活に制限があること、新しい食物に対して積極的な態度があることなどが把握できました。本調査ではさらにさまざまなグループに対してFGDを行いたいと思います。

その他、栄養関連の政府、国際機関、NGO関係者などに聞き取りを行いました。これによりマラウイでは現在子どもの栄養失調、特に長期の栄養失調である低身長に対する大きな動き「SUN（Scale Up Nutrition）」があることがわかりました。この動きは大統領府の栄養課が中心になり、保健省、農業省、ジェンダー省、教育省、ブンダ農業大学、各県、FAO、UNICEFなどの国際機関、各国政府開発機関、NGOなどが一丸となって低身長に取り組もうというものです。内容は妊娠中から子どもが2歳になるまでのトータル1,000日の栄養に焦点を絞ったものです。実際に村レベルでの活動展開にはまだ時間がかかるでしょうが、この動きの一員になることはプロジェクトの成功への一歩だと思われます。

最近のできごと 2012年12月～2013年3月

12月11日 シーブンファン地区ブンファナー村において井戸のモニタリングを実施

1月 6日～ 9日 聖マリア病院スタディツアー受け入れ

2月 5日～13日 ISAPH小早川理事長がラオスを表敬訪問

2月10日 聖マリア病院国際事業部の山崎裕章氏をJICA草の根技術協力事業によるISAPH・聖マリア病院合同プロジェクト立上げ準備のためマラウイに派遣

2月25日 ISAPH事務局の齋藤智子さんをJICA草の根技術協力事業によるISAPH・聖マリア病院合同プロジェクト立上げ準備のためマラウイに派遣

3月 4日 聖マリア病院国際事業部部長・ISAPH理事の浦部大策氏がJICA草の根技術協力事業の事前調査団としてJICA九州国際センター担当者の北澤志郎氏と共にマラウイに派遣

3月13日～22日 日本国際保健医療学会学生部会の実習生受け入れ
25日～29日

3月29日 ラオスにて2012年活動の1年会議を開催



ISAPHの役員名簿

役 職	氏 名	備 考
理事長	小早川 隆敏	東京女子医科大学名誉教授
理 事	深見 保正	元福岡県企業管理者
理 事	湯川 武	早稲田大学イスラム地域研究機構 招聘研究員
理 事	樋口 敬記	梓設計九州支社特別顧問
理 事	浦部 大策	聖マリア病院国際事業部
理 事	江藤 秀顕	神山復生病院
監 事	竹之下 義弘	弁護士(東京六本木法律特許事務所)



入会と寄付のお願い

ISAPHの活動を発展させるために、一人でも多くのご入会、ご寄付をお待ちしております。

法人会員 年会費：30,000円

一般会員 年会費：3,000円

入会ご希望の方、ご寄付をお願いできる方は、当東京事務所までご連絡いただければ幸いです。

【振込先】

郵便振込 口座名 特定非営利活動法人ISAPH
口座番号 00180-6-279925

特定非営利活動法人ISAPH 東京事務所

〒105-0004

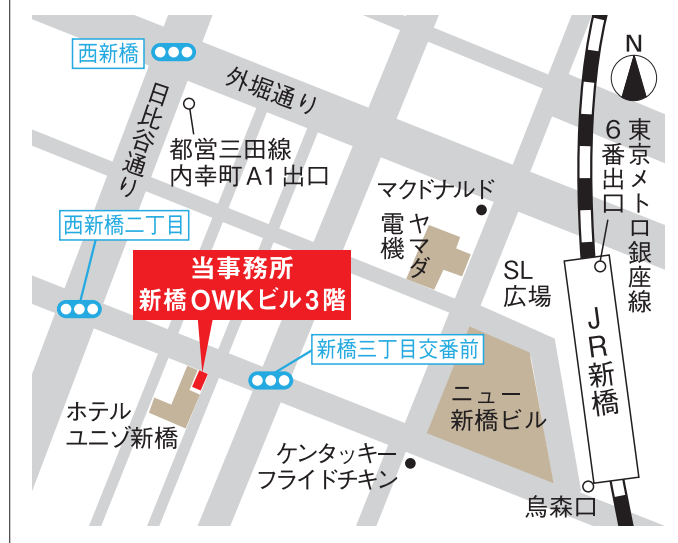
東京都港区新橋3-5-2 新橋OWKビル3階

TEL.03-3593-0188 FAX.03-3593-0165

E-mail tokyojimusho@isaph.jp

URL http://isaph.jp/

東京事務所案内図



【ISAPHニュースレター 第15号 編集スタッフ】

石原 潤子／磯 東一郎

社会医療法人
雪の聖母会



聖マリア病院

理事長：井手義雄 病院長：島 弘志

〒830-8543 福岡県久留米市津福本町422
TEL.0942-35-3322(代) FAX.0942-34-3115
URL http://www.st-mary-med.or.jp

- 厚生労働省臨床研修指定病院
- 厚生労働省歯科臨床研修施設
- 厚生労働省臨床修練病院
- A Baby-Friendly-Hospital-Initiative (赤ちゃんにやさしい病院) WHO・ユニセフ指定
- 日本医療機能評価機構認定施設 (一般病院Ver.5.0)

- 総合周産期母子医療センター (NICU・MFICU)
- 福岡県救命救急センター
- 地域医療支援病院
- がん診療連携拠点病院
- 福岡県救急告示病院
- 福岡県地域災害拠点病院

- 福岡県エイズ治療拠点病院
- 日韓医療技術協力指定病院
- 自動車事故対策機構療護施設
- ISO 9001 認証施設
- ISO 15189 認定施設
- 福岡県肝疾患専門医療機関

※本ニュースレターの発行は、社会医療法人雪の聖母会聖マリア病院にご協力をいただいています。